

岩戸満願寺と周辺の中世遺跡

中三川 昇（元横須賀市教育委員会）

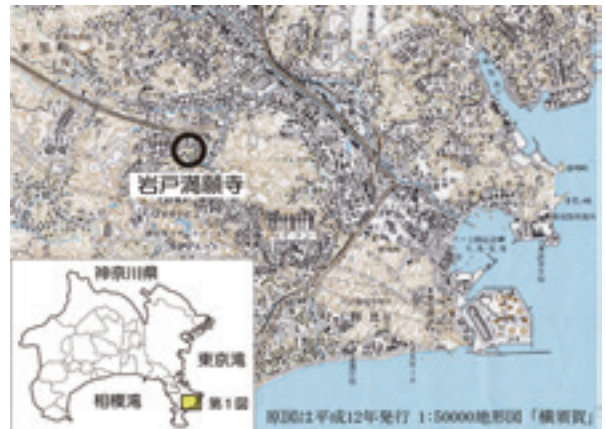
1. 岩戸満願寺について

(1) 概要

岩戸満願寺（以下、満願寺とする）は横須賀市岩戸1丁目4番地（第1図）に所在する臨済宗建長寺派の岩戸山を山号とする寺院です。北側に丘陵を背負い岩戸川に面した場所に立地しています（第3図）。満願寺は寿永3（1184）年に三浦一族の佐原義連が一堂を建立し、平家滅亡後に新ためて大伽藍を建立し満願寺と号したと伝わる寺院であります。伽藍整備が一段落したのは、貞応3（1224）年に義連三男の佐原家連が京都泉涌寺の開山俄禅房俊仍を招請し梵字の供養を行った頃ではとも考えられています（上杉 2007 ほか）。また、現本堂背後に現在は文化財収蔵庫にある運慶に近い仏師の作と考えられる重要文化財「木造菩薩立像・木造地藏菩薩立像」等が収められていた観音堂があり、その東側に佐原義連墓と伝わる凝灰岩製の五輪塔があります（第4図）。現在の寺域は現本堂の周辺地域のみですが、盛期はより広域と考えられ、その想定範囲が満願寺遺跡とされています。隣接地には中世遺物が出土した満願寺東横穴群や巴御前墓と伝わる凝灰岩製の大型五輪塔等があります（第3図）。

(2) 満願寺と周辺の主な中世遺跡等（第2図）

現在の満願寺は、岩戸川により形成された狭小な谷



【第1図】 岩戸満願寺の位置図（1/50,000）

戸の中ほどに位置しています。周囲の地形は大きく改変されていますが、かつては東京湾岸の久里浜地域から、三浦一族の拠点的地域であった大矢部・衣笠地域を繋ぐ経路上にありました。現在、久里浜湾以西の低地は市街地化していますが、この地域の大半は寛文7（1667）年完成の内川新田により陸地化した地域です。開発以前の具体的環境は不明ですが、鎌倉時代前後の時期にはその大半が水域（古久里浜湾）であったと考えられます。

当地域の平安末から鎌倉・室町時代の主な遺跡や神社は古久里浜湾の西岸地域に偏在しています。まず、現久里浜湾に接した八幡久里浜（旧村名、以下同）で



【第2図】 岩戸満願寺と周辺の主な中世遺跡等の分布図（1/45,000）

は海際に寿永元(1182)年に源頼朝が頼家誕生を祝して神馬を奉納し、文治元(1185)年に頼朝と政子が参拝した栗濱明神(現住吉神社)があります。大矢部方面に推定古道を進むと平安時代末から中世の遺構・遺物が出土した蓼原遺跡・八幡神社遺跡・蓼原東遺跡等があり隣接する久村には平安仏があった丸山不動堂跡や千住院跡があります。推定古道をさらに進むと満願寺です。その北西が三浦一族に関わる寺社等が密集する大矢部地域で清雲寺・薬王寺跡、頼朝創建とも伝わる満昌寺等が位置しています。大矢部西北西の丘陵に頼朝挙兵後に行われた「衣笠合戦」の舞台と伝わる衣笠城跡や平安時代に遡る坂ノ台経塚・大善寺等があります。なお、大矢部地域は谷戸口付近の平安時代後期の土器・馬具等が出土した泉遺跡以外に中世以前の遺跡は少なく、平安末以降に開発が進展した地域であったかと思われます。満願寺は東京湾岸の久里浜地域から衣笠地域に連なるこのような中世遺跡群のほぼ中間地で、「岩戸」の名の如く海浜部から大矢部地域に至る経路の入口・要衝でもあったかと思われます。

2. 満願寺遺跡の発掘調査の経緯と経過

昭和48(1973)年に重要文化財等の収蔵庫建設工事が行われました。当初の建設予定地は現本堂西側でしたが、中世瓦が多数出土し建設予定地が現本堂の南東側に変更され、同年12月に変更地の試掘調査が行われました(第4図)。その結果、中世以降の遺構・遺物が確認されたことから、収蔵庫の位置は現在地に再度変更されました。昭和63(1988)年に伽藍整備のための遺構確認調査が行われ、三棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜等が確認されました(第3～4図)。平成4(1992)年3月に確認調査報告書(横須賀市教委1992)が刊行されましたが、内容は遺構・遺物の概要等の記載にとどまり、瓦類も整理途中の状態でした。

3. 満願寺遺跡の主な遺構等(第5図)

満願寺遺跡の調査では、三棟以上の建物が想定できる礎石や礎石跡、柱穴跡、瓦溜などが確認され、多量の中世前期の瓦片が出土しました。土器・陶磁器類、鉄釘・北宋銭なども出土しましたが、量はわずかでした(出土遺物については別稿あり)。確認された主な遺構は、瓦葺の仏堂であったと考えられる仮称「中心建物」とその東西で確認された仮称「附属建物A・B」2棟、中心建物の前面に広がる瓦溜Ⅱ・Ⅲと西側附属



【第3図】 満願寺遺跡と周辺の遺跡(1/4,000)



【第4図】 満願寺遺跡の現況地形と調査地域(1/1,000)

建物北側の瓦溜Ⅰです。また、瓦溜Ⅱ付近より以南の地域では時期を越えた数次にわたる地業層が確認されています。以下は各遺構の概要です。

(中心建物)

旧参道西側のDトレンチの東端部から2か所、参道を挟んだ東側で1か所の計3か所の根石を残した礎石抜き跡が確認されました(根石1～3)。いずれも径1m前後の規模で、現在参道脇にある径80cm前後の安産岩製大型礎石6個等を設置するのに相応な規模・形状です。根石3の東約3mの位置で基壇端部と雨落ち溝かと推定

される部分も確認されていますが、西側のDトレンチ部分では確認されていません。礎石拔取り跡の芯々間の距離は根石1～2間が約3.1 m、根石2～3間が約7.8 mで、全体では約11 mを計ります。根石2と3間は未調査ですが未確認の礎石拔取り跡が埋もれていると考えられます。この建物の奥行は確認されていませんが、おそらくは柱間3間四面の瓦葺仏堂であったかと思われます。

(附属建物ほか)

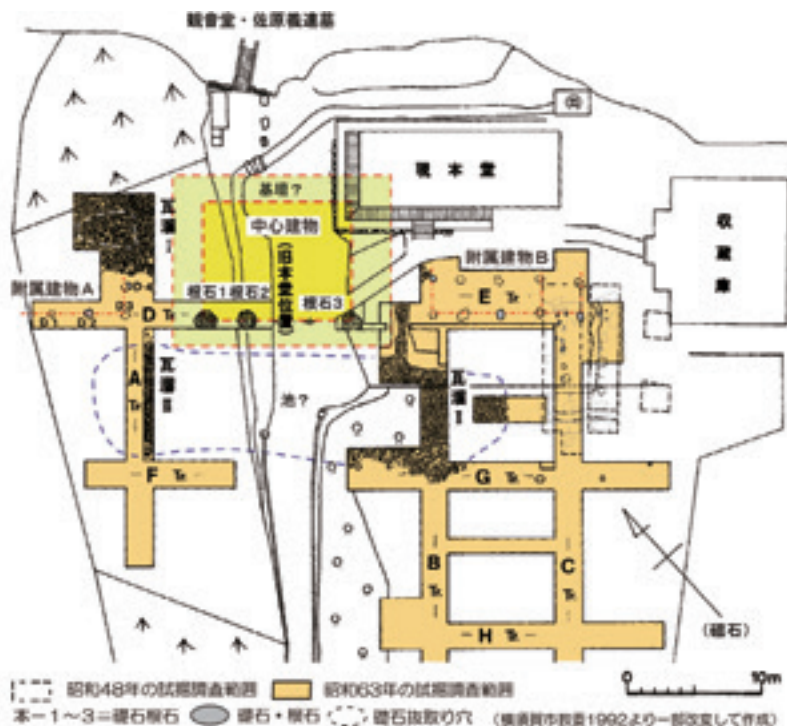
中心建物の東西で規模不明の建物2棟が確認されています。いずれも中心建物の礎石から約6 m間隔を置いて、礎石列の並びを揃える形で配置されており、中心建物の存在を前提として順次建てられたと考えられます。なお、これらの建物が瓦葺であったか否かは不明です。

附属建物Aは西側のDトレンチ内で確認された遺構で、小型の礎石2個と礎石拔取り跡2か所が確認されています。報告書では桁行2間(柱間約2.7 m前後)、梁行1間(柱間約2.3 m)の建物が想定されていますが、梁行の状況は不明で、独立した2間四面や3間四面などの小規模な仏堂等であった可能性も考えられます。また、礎石拔き取り跡の根石中に中世瓦が混在することから、報告書では後世の中心建物再建時の付加建造物かとも指摘されていますが順次建てられた建物とも考えても矛盾はありません。この点は附属建物Bについても同様です。

附属建物Bは東側のEトレンチ内で確認されました。小型の礎石3個と礎石拔取り跡7か所が確認され、報告書では桁行4間(柱間約2.5～3 m前後)、梁行1間以上(柱間約2.4 m前後)の建物が想定されていますが、附属建物B同様3間四面等の小規模な仏堂等であった可能性も考えられましよう。

瓦溜は三か所確認されています。Aトレンチ北端部の瓦溜Ⅰ、同トレンチ中央の瓦溜Ⅲ、B・Gトレンチなどの中心建物前面の瓦溜Ⅱです。報告書では、瓦溜Ⅰは比較的小型の瓦片が乱雑に堆積した状態であるのに対し瓦溜ⅡとⅢは瓦片が敷き並べられたような状態で確認されていることから、単なる廃棄ではなく埋立等の意図的な行為の結果かと指摘されています。

また、瓦溜ⅡとⅢを東西30 m南北10 m前後に広がる一体のものである可能性があり、その場合中心建物の前面に所在した可能性のある池を埋め、表面に瓦を敷き



【第5図】 満願寺遺跡の調査区と遺構配置図(1/500)

並べた結果ではとも指摘されています。しかし瓦溜の下層は基本的に未調査で実態は不明です。また、中心建物と同時期であったとすると、基壇端部に接する位置となり密着し過ぎた位置であるかと思われます。なお、瓦溜Ⅰは北側の竹林となっている平場に所在した可能性のある未知の建物(義連建立時の満願寺?)にも関わる可能性も考えられます。

満願寺遺跡については過去の調査記録を十分に再確認した上で、更なる調査が待たれるところです。

4. 周辺の中世遺跡について

満願寺周辺の中世遺跡は多数あるが、久里浜地域の遺跡や満願寺遺跡、佐原の泉遺跡等を除くと本格的な発掘調査の手が及んでいる遺跡は少ないのが現状です。中世瓦が出土した寺院は薬王寺遺跡と縄叩きの平瓦片がわずかに出土した満昌寺がありますが、ここでは多様な中世瓦が出土し、出土遺物等についての検討も行われている薬王寺遺跡を中心に紹介します。

薬王寺は和田義盛が建暦2(1212)年に父杉本義宗と叔父三浦義澄の菩提を弔うため建立したと伝わり、明治9(1876)年頃に廃寺になっています。現在は三浦義澄墓と伝わる石塔が市指定史跡「薬王寺旧跡」の中に残るのみですが、近隣の満昌寺に薬王寺本尊の薬師如来像や薬王寺にあった元応2(1320)年銘双式板碑等が残されています。最後の仏堂は薬王寺旧跡の南側にあったらしく、山門跡と伝わる場所に「駒繫石」があります。

西側の小字名は「池田」で、池の存在が示唆されています。その北側にはオオミドウ（大御堂か）の地名があり、仏堂の存在を示唆している。「オオミドウ」の西側には、三浦義澄嫡男の義村を祭神とする近殿（ちかた）神社があり、その境内と近辺からは中世瓦が出土しており、未発見の仏堂が存在したと考えられます。また、薬王寺旧跡の北側に隣接する薬王寺やぐら群からも中世の瓦と土器・陶磁器等が出土しています。近殿神社周辺出土の瓦には鎌倉時代前期から中頃のもの（第8図1～3）と室町時代頃（第8図4～5）のものがああります。特に前者の瓦は現大阪府の和泉国又は河内国との国境近辺で焼かれた瓦で、河内守護（三浦義村・泰村）、河内守（三浦光村）、和泉守護（佐原義連・盛連）等との関連が窺われる瓦です。薬王寺やぐら群の瓦は鎌倉時代末頃から室町時代頃のもので、近殿神社周辺の瓦とも異なり、この近辺にも瓦を用いた仏堂があったことが窺われます。このように見ると、あくまで推定ではありますが山を背に東西に仏堂が並び、南側に苑池を配した寺院の姿が浮かび上がります。薬王寺創建の経緯や往時の姿については記録が無く不明ですが、三浦氏宗家や宗家を継ぐ佐原氏・佐原系三浦氏らが関わり、比較的長期に亘って維持・整備された寺院であったのではとも思われます。薬王寺遺跡は義村以降の三浦一族と大矢部地域の寺社等との繋がりを示す重要な遺跡の一つで、岩戸満願寺の盛衰にも関わる寺院であったと考えられます。

また、三浦一族初代とされる三浦為通（永保3（1083）年没）の創建と伝わる円通寺跡と背後の深谷やぐら群については昨年度から横須賀市教育委員会による分布調査及び確認調査が行われています（磯口2023）。これまでに深谷やぐら群前面の平場から円通寺跡の可能性が高い地業面等が確認されています。調査は来年度以降も継続する予定とのことで、近い将来それらの姿がより明らかになると思われます。深谷やぐら群と



【第6図】 大矢部地域中心部の主な中世寺社と遺跡



【第7図】 薬王寺遺跡と関連遺跡（1/2,500）



【第8図】 出土瓦の一部（縮尺不同）

円通寺には、現在は清雲寺にある南宋仏の観音菩薩像坐像（重要文化財）や三浦初代の為通・三代の為継の墓と伝わる五輪塔、横須賀市最古の文永8（1271）年銘板碑等があった場所であり、調査の進展により三浦一族草創期の様相の一端がより明らかになるものと思われます。

【参考文献】

- 磯口健太郎 2023 「深谷ヤグラ群」『第23回 三浦半島地区遺跡調査発表会 発表要旨』横須賀考古学会
- 小林康幸・高橋香 2019 「相模」『中世瓦の考古学』高志書院
- 上杉孝良 2007 『改定 三浦一族』横須賀市
- 穴戸信吾ほか 2004 『薬王寺やぐら群』かながわ考古学財団発掘調査報告書 176
- 横須賀市育委員会 1992 『岩戸満願寺』横須賀市文化財調査報告書 第25集